





錨のない船

上巻

加賀乙彦

錨いかりのない船ふね 上巻

一九八二年四月二十二日 第一刷発行

著者——加賀乙彦

© Otohiko Kaga 1982, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二一三 郵便番号二三 電話東京三〇一四五二二二(大代表) 振替東京八一五〇〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。  
送料小社負担にてお取替えいたします。

錨のない船 上巻 II 目次

第一章 高原の夏 5

第二章 赤トンボ 121

第三章 使節 228

第四章 疾風 366

装  
幀  
司  
修

錨のない船

上卷



## 第一章 高原の夏

### 1

車から降りたアリスは、長い白いドレスの裾を湿った落葉から守るようにはからげ、しかし、脚を見せぬように巧みに歩みながら、後からのろのろ来る平三郎を振返って「滑りマスヨ。気ヲツケテクダサイ」と英語で言い、玄關の扉の前にかがんでいる田中にむかつては「どうして荷物をいれないの」と日本語で訊ねた。

「それがマダム」と田中は白いベレー帽を人差指の先で額の上へちよつとあげ、「鍵が合いませんのです。Rien à faire」と気取って答えた。

「沢山アル鍵ノウチ」と田中から会話を奪うように身を乗りだし、美しい英語の発音を誇るよう



にタキが口をはさんだ。「ドレガ玄関ノ鍵カワカラナイノデス。サツキカラ次々ニ試シテイルノデスガ」

「ドウシテぼぶカラ聞イテオカナカッタノダイ。ドレ、オカシ」とアリスは手を出したが、示された鍵束が埃だらけなのに気付き手を引つ込めた。鍵ぐらい洗っておけばいいのに。田中もタキも気がきかぬ。

「どれ、ぼくがやってみよう」と平三郎が鍵束を持ち、扉に勇ましげに進んだものの、この前の嵐のせいか二十センチは堆い唐松の枯葉に蹴躓いて、転ぶ寸前田中に支えられた。

「ババアはだめよ」と恵理がしゃしゃり出た。次々に鍵を差込むが効果なく、舌打ちをし、地団駄を踏んだ。「錆びついてるみたい。おかしいわね」

「ヴェランダから入ったらどうかしら」と安奈が提案した。

「マダム・アリツミ」と田中が頭をさげた。「やってみましたが、あそこは内鍵しかありませんで、C'est impossible. Rien à faire じゃ」

「鍵ガチガッテルノカモシレマセン」とタキが言った。「林ニ行き、鍵ヲモラツテキマス」タキは玄関前に並べたトランクや行李の荷物の監視をアサに命じ、走り去った。林はすぐ裏手の農家で別荘の管理を委託しておいた人だ。

「デモ随分荒レハテマシタネ、コノ家モ」とアリスは言った。平三郎に言ったつもりが、見ると庭の奥の弓場のあたりにひとりで行っており、代って安奈の微笑が答えた。

「まみー、仕方ナイワヨ」と安奈は考え深げに頷いた。「私タチ五年ブリデシヨウ。ソレニ、今年ノ台風トキタラ、夏ダトイウノニ暴レマワツテ。駅ナンカ濁流ニウズマッタトイイマスシ」

駅員の話では、例年にない長雨に加えて、台風の来襲のあった七月二十二日の夜には、山から溢れ出た水が道を川に変え、駅へと流れこんで大騒ぎになったという。東京でも江東の砂町一帯に家屋の浸水、倒潰があり、関東一円に鉄道の不通が相継いだ。梅雨明けを待つて別荘入りを計画していた来島家の人々は、梱包した荷物が湿気て黴びてきたり、当主の平三郎が風邪をひいたりして出発が延び、八月初旬になってやっと出掛けてきたのだった。

「デモネ、なんしー」とアリスは言った。「去年ハばぶガココニ来テイタノダロウ。ドウヤラ、アノ子ハ掃除モシナカッタラシイヨ」

この落葉のすさまじい堆積は、台風の影響だけではなさそうだ。ペンキは剝げ、窓硝子は曇り、屋根瓦が見えぬほどに枯葉が溜り、自転車もリヤカーも雨曝して赤錆びている。ペンキを塗り直し、徹底的な大掃除をしなくてはならぬ。アリスは窓から室内の雑然とした様子を覗き、顔を曇めた。家をめぐって歩きながら、屋根の上の枯葉落しやヴェランダの補修を考え、ふと自分が長い木梯子の下をくぐったことに気付き、悲鳴をあげた。

「まみー」と安奈が駆け寄ってきた。「ドunasツタノ、急ニ大キナ声ヲ出シテ、驚カサナイデクダサイナ」

「大変ダヨ」アリスは全身を瘡のように震わせた。「何カ恐ロシイコトガオコルヨ。不吉ダヨ。コノ家ハ呪ワレテルヨ」

「まみー」恵理も走り寄ってきた。「シツカリシテクダサイナ。何ナノヨウ」

「梯子ノ下ヲクグッテシマツタンダヨ。イッタイ誰ダネ、コンナトコロニ梯子ヲ立掛ケテオイタノハ」

誰かが長い木梯子を栗の大木に寄せていた。アリスはうっかりその下をくぐってしまった。「まみー、ソナノ迷信ヨ」と恵理が笑って梯子を拳でたたいた。上の方から枯枝が数本落ちてきた。

「迷信デハナイノダヨ、オ前」アリスは冷汗が染みだした腕をさすった。「昔……」

「昔」と恵理が話を奪った。「こねていかつとノ別荘ニイタ時ノコト、或ル日梯子ノ下ヲ私ガ通ツタラ不吉ナ事件ガオコリマシタ」

「ソウナンダヨ、えるしー」とアリスは溜息をついた。「ソレハ本当ノコトナンダヨ」

「デモ、ドンナ不吉ナ事件」と恵理は大きな灰色の眸を開いた。その目尻はまだ半分笑っていた。安奈は心配げに妹を見ている。安奈には話してある——蒸し暑い夏の午後、わたしが梯子の下をくぐった日、父のジエームス・リトル牧師が馬から落ちて亡くなったのだ。夏の光は黒い僧衣に吸い取られ、ジエームスの顔は草の葉のように蒼かったと。

タキが戻ってきた。さっきの鍵はやはり違っていたので、新しい鍵ですぐ扉が開いた。タキに続いて田中が、安奈に支えられてアリスが入った。淀んだ空気は徴くさく、足元の埃が気になつて、アリスは後ずさりした。今度は安奈が悲鳴をあげ、母に抱きついた。母親似の鋭い声で、後にいた恵理が飛びあがった。

「ナンシー、おどかさないでよ」

「虫。ほら、虫。虫」

「どこに、あら大変、マミー」恵理も母に抱きついた。

床の上を無数の黒い点が飛び跳ねている。一つ一つが黒光りするコオロギのような虫である。

体長四センチの余もある大きいのも、まだほんの子供もある。突然差込んだ外光に刺戟されたのか、箱に詰めた胡麻をゆすつたように一斉に飛び跳ね、ザンザン無気味な音を立てている。

「早く何とかしてよ」安奈は両眼を手で覆った。「わたし、虫は駄目なの。虫だけは駄目なの」

恵理とアリスは安奈を支え、吐きそうな姿の背をさすり、長椅子に横たえようとしたり。が、そこにも虫が跳ねていた。床だけではない。鴨居にも天井にも無数の虫がべったりいる。二人は安奈を外に連れだした。

「虫を退治しなくちゃ」と恵理が早くも立直り、元氣よく両手をはたいた。彼女は、荷物番のアサに、荷物は安奈が見ているから中に入れと命じ、平三郎を呼んだ。「ババア、早く来て。虫がいるのよ。虫よ。虫、虫」

「私モヤルヨ。サア」とアリスは恵理の声に奮い立った。虫は好きでないし、気味が悪いし、不潔でたまらぬが、放っておくわけにはいかない。

「マミーは外でお待ちなさいな」  
「いいえ、マミーもやるのよ」

平三郎が来た。中を覗いて「おう」としりごみし、娘と妻の手前ちよつと照れて「これは大変だな。戦争だ」とヘルメットの顎紐を締め、へっぴり腰で中に入った。

思い思いの虫退治が始まった。蠅叩き、新聞紙、雑巾、箒を手に、田中、タキ、アサ、恵理、平三郎が床を壁を家具を打った。相手はビョンビョン跳ねまわり、素早く巧みだが、間の抜けたところもあって、そつと後から近寄ると、簡単に叩き潰された。しかし、天井や柱の上へ逃げていったのには手出しができない。

「そうだ、いい考えがあるぞ」と平三郎は外へ出ていったが、間もなく電気掃除機を手に入ってきた。日本では、まだ珍しい、このヴァキューム・クリーナーは、今年の初め、平三郎が米国旅行の土産であった。首の付根の袋が脹らみ、轟々と音をたてて、クリーナーは天井や柱や壁の虫を、掻き消していった。

「ババア、すてきよ」と恵理が手を打って喜んだ。田中もタキも感心して眺めている。

「ネエまみー」と恵理が真面目くさって尋ねた。「ゴノ掃除機、虫取り用ナノカシラ」

「ソウデスヨ」とアリスは真顔で頷いた。

「アラ、嘘。嘘デショウ、まみー」

「本当デスヨ。あめりかニハ虫ガ多イカラ。一タ手デ取ッテルワケニイカナイノデスヨ」

虫退治が一段落すると、大掃除だ。アリスの指揮のもと、手拭のマスクをした一同が立働いた。昨年の夏、長男の健が住んでいたには、あきれるほどの塵芥で、とくに健が居室にしていた二階の部屋は、下着や紙屑や空瓶の山で、みんなをあきれさせた。「ボブって何をしていたのかしら」と安奈が愚痴ると、「男の子ってそういうものですよ」とアリスは執り成した。一家がベルギー、ドイツと海外にいたあいだ、健だけはひとり日本に残っていた。身のまわりの世話をやく者が誰もいなくなった長男の生活を、アリスは憐れんだ。やっと帰国して、これから面倒をみてやろうと喜んでいたので、健は兵役で軍隊にとられてしまった。

「ねえ、ババアを見て」と恵理がアリスと安奈の注意を促した。

元駐独大使来島平三郎は重装備の出立ちであった。トランクから取出した真新しい作業服——軽井沢で農耕作業をするために日本橋の間屋街まで出掛けて買ったもの——を着、マスクを付

け、頬被りの上に麦藁帽をかぶり、長靴をはいている。

「あれでは、動くのは大変よ」と安奈が頭を振った。

「あらあら、もうお疲れの御様子」と恵理が笑った。平三郎は床を拭うモップを置き、ヴェランダの長椅子に坐つてパイプを吸おうとしたが、まず頬かむりを取り、マスクを取らねばならなかった。

「ぐあきゆうむ・くりーな―デオ疲レナノヨ」アリスは、目くばせし合つてる娘たちをたしなめた。

しばらくすると平三郎は、林を渡つてくる涼風に目を細め、よく見ると心地よげに居眠りを始めていた。

三時間あまり、大車輪に働いたおかげで家の中はかなり綺麗になった。敷物や蒲団や毛布が所せましと干されている傍で、アリスは、愛用の手帳に鉛筆を走らせた。

1、腰羽目ノ白べんき、全面的ニ塗換エ。

2、窓硝子七枚破損、新品ニ換エル。

3、屋根ノ枯葉落シ、大工カ林ニ頼ム。

4、流シノとたん腐蝕甚シ。すてんれす・すちーるニ換エル。

と、まだ庭を調べていないと気付き、ヴェランダから外へと出てみた。

かつて、来島邸は、唐松林と林間を埋める苔庭とで知られていた。秋の落葉と冬の雪は苔の大敵で、土地の植木屋に頼んで、常に手入れを怠たらず、お蔭で夏には青々とした苔を楽しめた。ところが、数年の留守の間に植木屋の代が変り、連絡が跡切れたためか、庭は放置されたままであ

った。厚き二インチはあろうと思われる枯葉の堆積を竹熊手で掻き寄せてみると、果して苔はすつかり死に絶えていた。アリスはメモに書き加えた。

5、庭ニ芝生ヲ植エルコト。恵理がテニスノ練習をしたいから、芝生にしてほしいと言いついでいるのだ。木を二本、いやあれとあれを切つて、つまり四本切つて、平な空地を作らねばならない。これは相当の物入りだろう。まず植木屋に見積らせてみよう。その上で、どうするか決めよう。すると、アリスの目の奥に、明るい芝生の上でテニス・ボールを打つ恵理の姿が映つた。いえ、お金なんかいくらかかっても芝生を植えねばならない。

アリスは庭の突端に來た。小鳥の水飲場として作った石囲いの浅い池がある。落葉を取り除けばこれは充分使えそうだった。水は澄んでいる。そうそう、小鳥たちのために巣箱を作つてやろう。

#### 6、巢箱ヲ五箇。

こういう細工は健が上手だった。たしかあの子につくつた箱があるはずだが。アリスは心当りの幹を見上げたが、錆びた針金らしいのが幹を巻くだけで巢箱はなかつた。大工に作らせるか。あるいは小諸の小鳥屋に探しにいかねばなるまい。

コネティカットの田舎にある白塗りの木柵を模した柵が、背高な雑草に半ば埋もれている。

#### 7、柵ノペンキノ塗り直し。

弓場の草がすこし引き抜かれ、三重の丸を描いた的が剥き出しになつていた。数々の矢の跡がついた板は下の土に当る部分が腐り、いびつになつてゐる。さつき平三郎が、草を抜いたらしい。ベルギー大使になる前、外務省通商局長時代に平三郎は弓道に凝り始めた。元来不器用で運動神経の鈍い彼は、ゴルフやテニスに人並みに手を出したが長続きせず、弓だけが唯一の趣味だ

った。永田町の本邸にも小さな弓場があり、とにかく熱心に練習にはげんだものだった。ただ、外国に赴任すると、それがままならず、この五年間、中断していた。

#### 8、弓場ノ整備。

荷物の中にも弓矢が入られているし、平三郎のために、ぜひ整備せねばならぬ。だが、やるが多すぎはしないか。アリスは深い溜息をつき、  
6、巢箱、  
7、柵ノペンキ、  
に棒をひいて抹殺した。考えた末に、  
4、流シノすてんれす張り、も消した。やはり節約しなくてはならぬ。とにかく日本は支那とこれで四年間戦争を続けているのだ。今年の正月、帰国してみても最初に驚いたのは、食物も衣料も、日常の用になる物資の不足が目立つことだった。ドイツでコックの田中が罐詰や葡萄酒をしこたま買いこんだのを、大袈裟な心配と嗤った自分が不明だった。ドイツも戦時体制で食糧の統制がきびしいが、日本ほどではなかった。日本では肉や卵が買えず、チーズやバターなどはまず手に入らず、外国産の葡萄酒など全く店頭から姿を消している。田中には感謝すべきだろう。充分一年分の罐詰と酒はあるという。

アリスは、心地よげに船を漕いでいる平三郎に毛布を掛けてやると、田中や女中たちとともに荷物の整理を始めた。

当初、三日で終える予定だった山荘の整備が実際には十日の余もかかってしまった。屋根をべったり覆った枯葉は一インチ半もあり、醗酵して何とも不快な異臭を発していた。これを落すためには大の男が数人必要と思われたのに、頼んだ大工たちはみんな出征中で、やっと見付けた元鷹職の老人は、高所にあがるのもやっとのうえ、仕事ぶりも覚束なく、三日経ってもまだ屋根の上をのろのろ這いまわっている始末であった。それなら自分がやろうと梯子をのぼりかけた平三



郎をアリスは必死でとめねばならなかった。さて、屋根の枯葉落しをどうにか終えてみると、下の瓦は痛みがひどく、かなりの数取換えねばならないとわかった。この屋根職人を探すがまた一苦勞で、上田の在郷出身のタキが、実家の母親トクを介して村人に頼み、やっと来てもらった。芝生を植えるのは野辺山高原の老牧夫を、これもトクが探し出してくれた。いまだき、芝を植えて育てている人などまれで、この牧夫は牧草地の片隅に生えていた天然芝を提供してくれたのである。また硝子屋は妻君ひとりの商売で注文に応じきれず、ベンキ職人もおいそれとは見付からなかった。要するに極端に男手が不足していて、アリスが無造作に手帳に書きつけた計画の實行は容易ではなかった。

アリスは頭に浮んだことはすぐ手帳に書きつけていく。というのも、あんまりいろいろな思い付きが一時に浮ぶので、一つをやっていると他を忘れてしまう怖れがあるからである。が、彼女には思い付きを實行にうつす段になって、煩瑣な交渉や支払や事務をする能力が欠けていた。いや、欠けていたというより、自分の計画がすぐ実現するものと頭から決めていたので、實行に当たって面倒な手続きが要することを忘れていたのである。その實際面を受持つのがタキであった。通商局長時代からもう十年近く来島家にいるタキは、その後の海外生活中もずっと内住みで、アリスにとって無くてはならぬ人になっており、*「マミー奥様のメモ帳」*を自由に閲覽できる特権者でもあった。枯葉落し、屋根の修繕、芝生植え、硝子の修復、ペンキ塗装と、マミー奥様の夢を実現してくれたのはタキの力であった。

建物自体が整うと、アリスの注意は内部に向いた。玄関の壁掛を換え、寝台用マットの破れを直すと、家の中心にある居間兼客間の広間を、*「フランドル風」*にしつらえたいと思った。